

# 見えにくさのある児童生徒と教育の環境

氏間 和仁

人は、カメラ眼という見  
る仕組みを手に入れ、それ  
を発達させて繁栄してきた。  
カメラ眼は、球形の眼球と  
ピント調節機能を備えてい  
る。この仕組みのおかげで、  
遠くのものから手元まで視  
距離に応じた連続的なピン  
ト合わせが可能となり、鮮  
明に外界のようすを視覚で  
捉えることができる。

視覚の特徴は、遠くの対  
象物の存在までも捉え、同  
時に、広範囲に情報を入手  
できることだ。そのため、  
私たちは幼少期から視覚を  
駆使して多角的に捉え、そ  
こから学びながら様々な機  
能を発達させてきた。例え  
ば、頭の上で「カーカー」  
と聞こえたとき、そこに視  
線を向けると、ガラスが電  
線に止まっているようすを

では無いだろうか。  
令和元年の視覚に障害の  
ある小中学生の在籍状況は、  
特別支援学校約二千八百人、  
特別支援学級約六百六十人、  
特別指導教室利用者約二百人  
であった。小中学生数は約  
九百六十万人であるから、  
先の割合よりも随分少なく  
感じる。実は、視覚障害の  
ある人の七十五は六十歳  
以上ののだ。この年齢層の  
偏りが特徴といえる。

このようなきを著くと、  
学校で視覚に障害のある児  
童生徒に遭遇することは減  
多にないと思われの方がい  
るだろう。

学校保健統計調査(令和  
二年)では、視力が〇.七  
未満〇.三以上の割合は小  
学生約一、中学生約一  
四、高校生約一三%で  
あった。この割合は、日常  
的に眼鏡やコンタクトレン  
ズで矯正していない児童  
生徒の裸眼視力を対象にし  
ている。印象が変わったの  
ではないだろうか。さら  
に、ある調査によると視力

〇.七未満〇.三以上の場  
合、黒板からの距離が七  
メートルで、七・五平方セ  
ンチメートルの文字を認識  
できる児童生徒は九割を下  
回る。つまり、黒板に書い  
た文字の認識に困る児童生  
徒が一定割合に達している  
ことを意味する。

一方で、これらの結果を  
考慮して学級経営、例えば  
座席の配置や板書時の文字  
の大きさなどの調整がなさ  
れるケースはどれほどある  
か。

(広島大学大学院准教授)

## 保育施設における子どもによるICT活用

飯島 典子

学校教育現場では、GI  
G Aスクール構想(文部科  
学省、二〇一九)の実現に  
向け、児童生徒がICT  
(Information and commu-  
nication technology・情報  
通信技術)を日常的に活用  
するよう教育改革が進めら  
れている。一方、保育施設

子どもがICTを活用す  
ることは、直接的体験(ア  
ナログ)とICT(デジタ  
ル)の二項対立で捉えられ  
る場合もあり、否定的意見  
も少なくない。その背景に  
は、子どもへのICTの使用  
が学校よりも家庭が先行  
し、ゲームなどに多く使  
われている。

## 教科書ご採用検討のための見本が入手でしたらご請求下さい。

ご勤務先・ご所属等が変わりましたら、当社まで  
お知らせ下さい。なお、ご自宅の住所をご教示頂けま  
したら、本紙「土筆」を「ご自宅宛にお送り致します」  
サービス(Individual Address) (個人情報厳密に管理致します)

## 特別支援教育概論

特別支援教育概論 花原 崇 編著

## 見えの困難への対応

見えの困難への対応 氏間和仁・永井伸幸 編著

## 聞こえの困難への対応

聞こえの困難への対応 加藤哲明 編著

## 知的障害教育領域

知的障害教育領域 坂井新一郎・坂井聡 編著

## 身体不自由教育領域

身体不自由教育領域 櫻木暢子・菅井新一郎 編著

## 運動機能の困難への対応

運動機能の困難への対応 中野宏輔・櫻木暢子 編著

## 健康面の困難への対応

健康面の困難への対応 金森亮治・大杉成喜 編著

## 合理的配慮

合理的配慮 岡田知則 編著

## 以下続刊

重複障害教育領域① 櫻木暢子・金森亮治 編著

## 複数の困難への対応

複数の困難への対応 櫻木暢子・菅井新一郎 編著

## 「気になる子」をみるかかわる視点

「気になる子」をみるかかわる視点 発達障害教育領域 学習と行動上の困難への対応 言語障害教育領域 ことばの困難への対応 言語障害教育領域

## 重症障害教育領域②

重症障害教育領域② 言語障害教育領域 ことばの困難への対応

## 生涯にわたる配慮・支援

生涯にわたる配慮・支援

## 新版 公衆衛生学実験 実習

新版 公衆衛生学実験 実習 角野 猛・岸本 満 編著

## 保健科教育法

保健科教育法 植田誠治・杉崎弘周 編著

## コンパス

コンパス 住本亮彦 編著

## 教育・相談

教育・相談 栗山直夫・小林 徹 編著

## 福祉施設実習テキストブック

福祉施設実習テキストブック 下ごしらえ利用者理解から始める実践1-1

## 子どもへの理解と援助

子どもへの理解と援助 飯島典子・本郷一夫 編著

## 子どもへの構音障害

子どもへの構音障害 能登谷由子・諏訪美幸 編著

## 福祉ボランティア

福祉ボランティア 菅原好秀 著

## 人類的課題を解決する ツールとしての栄養学

村上 健太郎

最近の推計によると、地球上の  
八億二千万人以上が栄養不足であ  
る一方、肥満または過体重の成人  
は十九億人に達しています。不健  
康な食事は、疾病罹患と早期死亡  
の主要な要因であり、危険な性交、  
飲酒、薬物、喫煙に起因するすべ  
てのリスクの合計よりも、食事単  
体によるリスクのほうが大きいとい  
考えられています。このような食  
に關連する健康問題と社会への  
影響の大きさを考えると、栄養  
学において、食の健康影響を説明  
することの重要性はますます大き  
くなっていくといえます。

〇%、使用される淡水量は全体の  
七〇%にのぼると推定されます。  
世界人口が今後も増え続けること  
を考えると、持続可能な社会の実  
現のためには、現行の食システム  
の抜本的改革が不可欠です。  
このような食にまつわる健康・  
環境問題に対し、現時点で提示さ  
れている解決策は、生産者や供給  
者の関与が不可欠です。

者、行政などからの視点に偏って  
いるように思われます。例えば、  
持続可能なカタチで食料生産効率  
を上げるとか、健康的な食品の生  
産や流通を促す政策を立てると  
いった具合です。

乗からなる連続的なプロセスです  
が、今までの栄養学は調理と摂取  
の部分にその力を置きすぎてい  
たように思えます。  
もちろん、個人がどのように食  
べるかを規定するのは、個人レベ  
ルの要因だけではありません。近  
隣の食環境や食料生産・流通シス  
テムなど、社会をかたちづくる



Nブックシリーズ	各巻B5判
疾病の成り立ち:臨牀医学(第5版)	田中 明・加藤昌彦 編著
新版 食品学II (第2版)	田所忠弘・安井明美 編著
五訂 食品加工学	北尾 悟・鍋谷浩志 編著
四訂 基礎栄養学	木元幸一・鈴木和春 編著
五訂 応用栄養学(第2版)	津田博子・麻見直実 編著
六訂 公衆栄養学(第2版)	井上浩一・小林実夏 編著

## 新刊教科書

(表示価格税10%込)

## 特別支援教育免許シリーズ

各巻B5判

特別支援学校教諭免許取得のための初体系的テキストシリーズ  
シリーズ監修 花原 崇・岡田知則・菅井新一郎・川住隆一・宇高二良

特別支援教育概論 花原 崇 編著

見えの困難への対応 氏間和仁・永井伸幸 編著

聞こえの困難への対応 加藤哲明 編著

知的障害教育領域 坂井新一郎・坂井聡 編著

身体不自由教育領域 櫻木暢子・菅井新一郎 編著

運動機能の困難への対応 中野宏輔・櫻木暢子 編著

健康面の困難への対応 金森亮治・大杉成喜 編著

合理的配慮 岡田知則 編著

以下続刊

重複障害教育領域① 櫻木暢子・金森亮治 編著

複数の困難への対応 櫻木暢子・菅井新一郎 編著

「気になる子」をみるかかわる視点 発達障害教育領域 学習と行動上の困難への対応 言語障害教育領域 ことばの困難への対応

重症障害教育領域② 言語障害教育領域 ことばの困難への対応

生涯にわたる配慮・支援

新版 公衆衛生学実験 実習 角野 猛・岸本 満 編著

保健科教育法 植田誠治・杉崎弘周 編著

コンパス 住本亮彦 編著

教育・相談 栗山直夫・小林 徹 編著

福祉施設実習テキストブック 下ごしらえ利用者理解から始める実践1-1

子どもへの理解と援助 飯島典子・本郷一夫 編著

子どもへの構音障害 能登谷由子・諏訪美幸 編著

福祉ボランティア 菅原好秀 著